

もっとまじめに売れろ

菅田 忠志

「これ木綿じゃないみたいやけど…」

「いや木綿です」

先日、シルバーカレッジの地域活動団体S
C友が丘クラブ」の「旗」をアイロンプリン
トで作ろうと、三ノ宮のユザワ屋へ木綿の生
地を買いに行った。布地専門店として名高い
この店も、最近では化粧品から文房具、各種用
紙類まで揃えた大きなビルになっており、店
員に木綿生地売り場を聞き、2階へ上がる。
あるわあるわ、洋服用から和服用。子供用
から手芸の生地。カラフルな舞台衣装のエリ
ヤには、まぶしいばかりのキンキラ布地が並
んでいる。いろんな種類の生地の山に圧倒さ
れながら色合い、厚さを手触りで確認し、う
すいオレンジ系の木綿生地1メートルをカットして

1

もらい買って帰った。

クラブのロゴマーク、名称文字をパソコン
からアイロンプリント専用のプリント紙に表
裏さかさまに印字出力させ、木綿の生地の上
に重ね、説明書のとおり加熱したアイロンを
押しつけた。

おかしい。以前にも同じ方法で2種類の旗
をプリントした経験にもかかわらず、今回は
うまくプリントしない。生地にシワが出てく
る。そのうち、シワはきたなく波うちはじめ
た。

アイロンの温度設定は「木綿」のところを
指しており、高すぎるとは思えない。前回の
プリント紙とメーカーが異なるので、印字イ
ンクと生地との相性が悪いのか…。

買ったときに確認した巻き布にははっきりと
「綿100%」と明記していたはずだが。

女房に言われて生地の切れ端から出ている

2

細いひげ状の数本にマッチの炎をそつと近づけてみた。燃えない。気のせいか少しちじれる感じもする。

アイロンでのプリント作業を中断し、一部がくちやくちやになつた生地を持つて店に行き、もう一度売り場の表示を確認した。他にも色々な色合いの生地が並んでいたが、すべてに綿100%の表示がされていた。

「この生地、午前を買つてアイロンプリントしたら、こんな具合にちじれてしまつ。木綿じゃないんと違つ？」

忙しそうにレジを打つ若い女性は「ここではわかりません。カット場で聞いてください」と相手にしてくれない。

「この生地、午前を買つてアイロンプリントしたら、こんな具合にちじれてしまつ。木綿じゃないんと違つ？」今度はおばさんと交渉

3

再開だ。

カットの手を止め、手に取つた生地を触りながら、間髪いれずに「木綿に間違いありません。アイロンプリントのことは詳しく知りませんが、設定温度がきつすぎで専用紙のインクが溶けて布地にしわをつけたんではないですか？」

「しかし、この部分はアイロンプリントする前に、シワを伸ばそうとハンカチを当てて行った所やで。ここもちじんどるやん」

「そう言われても温度がきついようにしか思えませんが……」

別に立ち寄る所もあり、ここで余り長居もできないため、

「そこまでいうならもう一度温度を少し下げてやつてみるわ」と店を出た。

別の用件を済ませ、地下鉄のりば付近まで引き返したが、もやもやする頭は納まらない。

4

念のため別の棚の木綿を買っておこうと引き返し、さきほどの生地近くで綿100%のものを探した。

「あれ？」買っていった生地を棚に立てかけてある巻いた生地にはすべて「綿100%」と表示されているものの、棚全体の表示札には「ガード…？」だったかの生地名称の下に綿60%、ポリエステル40%」と表示されているではないか。

さっそく店員に

「この棚の表示と、この生地の表示は食い違っている」と確認する。「この段階で自分には「抗議」するだけの知識も無いので「確認交渉」だ。

どきどきとしたのか、すべに確認してきます。どつちやらこの店員もこの生地の名前と素材が判っていないらしい。

「申し訳ありません。表示の間違いで綿10

5

0%ではありませんでした」と太いファイルに挟まれた生地見本とその説明文の記されたページを開き示して頭を下げた。

「ええ加減やなあ」と今度は「抗議」口調に変えてみたところでしれたもの。

「すみません。綿100%のものとお取替えますので、別の棚からお選びください」

あゝあ、しんどい買物させられた。時間と交通費の無駄づかい。腹立ついらだちはしばらくつづく。

「もっとまじめに売れ」

6